



R I. 第2620地区 静岡第2分区
三島西ロータリークラブ

週報

第1796号

事務所 静岡県三島市中央町4番9号 2F
TEL (055) 976-6351 FAX 976-6352
例会場 静岡県三島市本町14-31 みしまプラザホテル
TEL (055) 972-2122
会長 矢野 敏夫 幹事 西本 和夫



広重版画より 三島 朝霧

第1858回例会

2010.10.21晴

於：米山梅吉記念館

司 会

石井良衛君

ロータリーソング

「日も風も星も」
指揮 佐々木雅浩君

会長挨拶

会長 矢野敏夫君

10月はR I 手続要覧によれば、「職業奉仕月間」と定めていますが、日本のロータリーでは、この10月を日本独自の「米山月間」とも定めています。

この職業奉仕については、毎月初めの例会で音読するロータリーの綱領の第2に「事業および専門職務の道徳的水準を高めること、あらゆる有用な業務は尊重されるべきである」という認識を深める事、そしてロータリアン各自が、業務を通じて社会に奉仕するために、その業務を品位あらしめること。」とあります。

これは「入りて学び、出でて奉仕する」という別の言葉でも分かりやすく説明されています。「入りて学ぶ」とは通常例会に出て心を磨く、ということであり、また「出でて奉仕する」とは磨かれた倫理をもって自分の仕事に取り組む、ということだそうです。

また米山月間については、日本のロータリー独自の国際奉仕活動「米山記念奨学事業」の目的と意義を認識し、その発展を考えていかなければなりません。この米山奨学制度は奨学生にロータリアンがカウンセラーとして付き各種アドバイス、相談等をしたり、奨学生が毎月世話クラブの例会に参加して親善を図るなど、他の奨学制度にはないメリットがあると思います。日本で米山奨学生として学んだ学生たちが、日本の良き理解者として、

日本と世界とを結ぶ平和の架け橋となって国際社会で活躍することを願っています。

本日はこの米山奨学制度を通して、米山梅吉翁を偲びつつロータリーの奉仕活動を今一度考えてみたいものです。

出席報告

	出席総数	出席率	メークアップ	修出席率
前々回	30/47	63.83%	37/47	78.72%
今回	36/51	70.59%	会員総数	55名

欠席者 飯田君、石井(彰)君、岩崎君、勝間田君、窪田君、栗田(正)君、栗田(誠)君、黒田君、佐野君、鈴木(郁)君、鈴木(正二)君、須田君、諏訪部(敏)君、矢岸君、米山君

幹事報告

幹事 西本和夫君

- ① 9月8日の台風9号による記録的な大雨で莫大な被害を受けた小山町へ、R I 第2620地区よりお見舞い金として30万円をお渡ししました。☑
- ② 見晴学園より見晴フェスティバルへの参加のお礼状が届いています。☑
- ③ 11/3(祭日)のGSE受入及び街頭募金の出席及び御協力をお願いします。☑

2010~2011年度
国際ロータリー会長
レイ・クリンギンスミス

地域を育み、大陸をつなぐ

日本特有の「米山月間」にむけて

瀬川幸信君

米山記念奨学事業の歴史は、1952年戦後間もない時期に、東京ロータリークラブが、日本のロータリークラブ創立に貢献した実業家、故米山梅吉翁の功績を記念して、後世に残るような有益な事業を上げたいとの強い思いから発足した事業で、海外から優秀な学生を日本に招き、勉学を支援する奨学事業「米山基金」の構想でした。そこには、二度と不幸な戦争の悲劇を繰り返さないために、国際親善と世界平和に寄与したいという当時のロータリアンの強い願いがあったのです。

1954年に奨学生第1号のタイのソムチャード君が来日して以来50数年を経過したこの奨学事業は、2000年には受入れ奨学生1090名、約20億超の奨学事業規模にまで発展しましたが、バブル経済の崩壊により寄付金収入が減少し続け、近年では、毎年800名の受入れ留学生を約15億円の事業規模に縮小しましたが、現在でも国内最大の民間奨学事業として存在価値を堅持しています。事業開始以来、1万5,500余名、116ヶ国の留学生に累計で460億円以上の巨費を、全てロータリアンの皆様からの寄付金で支援を行って参りました。

2620地区では、毎年20余名の奨学生を受入れ、開始以来300名以上の奨学生を、山梨・静岡の親善大使として世界に送り出してきました。

ロータリー米山記念奨学委員会委員長

富田 明さん

(ガバナー月信より)



ROTARY NEWS

パキスタンでポリオ撲滅と洪水被災者救済が同時進行

パキスタンのカイバル・パクトゥンクワ州とパンジャブ州で、大洪水により衛生設備の乏しいキャンプでの避難生活を強いられている何百万という人々の救済活動に、ポリオ撲滅の活動者やリソースが動員されています。

ポリオ撲滅のための人材やインフラが既に充実しているパキスタンでは、大洪水の被災地でのニーズを調査し、水感染病やそのほかの伝染病の状況を監視するために、これらのインフラが活用されています。感染者が最も多い地域では、ポリオを専門とする疫学者や監視要員が配置され、自動車、ラジオ、衛生電話、医薬品、飲用水タンクなどが備えられています。

国連によると、今回の大洪水では、推定1,500人の死者、2千万以上の被災者が出ました。潘基文国連事務総長は、この災害を、国連が創設されて以来最悪のものであると述べています。

大洪水によって、適切な温度でポリオワクチンを輸送するために不可欠なコールドチェーンなどの不足で、同地域の医療システムが深刻な状況に陥っています。

「パキスタン全土を襲った洪水で、ポリオ撲滅活動がさらに困難になっています。私たちは、避難キャンプの子どもたちにワクチンを投与しようと試みています」と話すのは、パキスタンのポリオ・プラス委員長、アジズ・メモンさんです。

「2010年後半には、感染が広範囲に拡大してしまうリスクが非常に高くなっている」という報告が、世界ポリオ撲滅推進計画（GPEI）から出されており、これを防ぐため、5歳未満の子ども2,400万人を対象とする全国予防接種日が、9月と10月に予定されています。国際ロータリーは、9月の全国予防接種日で使用する9万個のワクチン運搬器のための資金を提供しました。

多くのニーズを抱えている洪水被災者のために、パキスタン全国において、ロータリー関係者が支援活動を行っています。パキスタンとアフガニスタンにまたがる第3271地区と第3272地区のロータリー・クラブとローターアクト・クラブは、食糧、衣料、医療、シェルターなどを提供する活動を行っています。

シンド地方にあるサマロ・ロータリー・クラブに所属する医師、カシフ・アジズさんとバルデブ・マヘシュワリさんの二人とローターアクトーたちが、8月末と9月初めにピルパトにある医療キャンプを運営し、2,300人以上の患者の治療に当たりました。

(週報担当：柳田英雄)